教育相談からみた学力問題

センター協力研究員（立正大学心理学部助教授）　岡　本　淳　子

教育相談では，その子どもの人格全体の中で学力をとらえる。相談に訪れる時点では，どの子どもも持てる力は発揮できるような状況にはなく，学力どころでないことが多い。しかし，学力は陰に陽にその子どもの問題行動のあり方を左右しており，かつ，問題行動からの回復のプロセスでは，学力がその子どもの自立を支え，子ども自身も学力の課題に正対する経過を必ず経るものである。教育相談においても学力は子どもの生き方を支える大きな影響力をもつものとして重視されるものであり，近年では治療的家庭教師の活用など，それぞれの子どもの生き方に沿った学力養成への支援を積極的に行っている。

学力にどう向かい合うかは，生き方への選択に密着している。教育相談の経過の中で，ある子どもは勉強にただ劣等感を抱いて学校に背を向けるのではなく，自分にとって必要な学びだけを正面に据えてあとは潔く捨てていく。ある子どもは自分にあった学び方を見つけて，こつこつと努力しながら成就感を獲得して着実に進路に結び付けていく。ある子どもは思い切り学んでいい自分のポジションをつかむや，急速な伸びをしていく。

学力のグレイドは実にさまざまだが，子どもたちの自立への過程を見ていて共通して言えることは,「子ども自身がそれぞれ，自分なりの学び方を自分で定めていく」ことだ。大上段に言えば，自分にとっての勉強することの意義を自分で感じ取って，勉強というものをどのように自分に取り入れていくか，自分にとっての勉強の位置づけを認識し，学び方を見つけた時，子どもは心から勉強に向かう。生き生きとして自分を取り戻しつつあるそのときの様子は，学びが人間にとって本能的に重要であることを感じさせる。

しかし，問題発生時にみられる子どもが示す学習への拒絶感の大きさに，大人はさじを投げて早々に「勉強はだめな子」としてあきらめがちだ。自己評価の低い子どもの背景に，親自身が我が子の学力を自分たちで何とか考えようとはしないあきらめが多く見られる。

教育相談に携わっていて，学力への態度を保障したことにより大きな伸びを示した少年の例があった。中学2年でいじめられ，友人や教師の批難の渦の中に巻き込まれてずたずたになり，学習もあきらめて混沌としてきていた少年に，筆者は「思い切り勉強してみろ」と勧めたことがあった。結果的に見ると，その助言が彼を大きく動かし，その後彼は生き方が一変して，10年たった現在は医師の卵として人道的な医師のあり方を模索している。混乱の中にある子どもに対して勉強を勧めるということは一般的にはあまりしない助言であるが，彼自身の全人格の中でそこに生きる道が残っているのを相談担当者として見ての上だったと思う。彼自身にとってその一言がどれほど自分の人生を動かしたかが後に語られたが，一人の子どもにとっての学力への的確な評価や位置づけを，周囲が助けることの意義を感じる印象深い一例であった。

もう一例，自分の学力を思う存分発揮することを見出すまで，長年の年月を要した例がある。親が自分の得意とする知識を子どもの年齢の標準を超えて十二分に注いだ少年が，周囲の仲間関係や学校教育から浮き，不適応になり自我が崩壊しそうになる危機を経て，自分自身を表現できる学問にたどり着くまで，約12年間を要した例である。この少年が自らの学びを本格化するまでの行程を共に歩んで，筆者は，人格全体の中に学力がバランスをもって位置づくことがいかに重要であるかを感じさせられた。

長く苦しい葛藤を経る過程にも子どもなりの学びがあるが，自我が平衡状態を保ったときには，子どもたちは自覚的に必ず学びへの認識をもつものだ。子どもたちが発達途上でしばしば発する，「こんな勉強やって大人になって何の役に立つのか！」という鋭い疑問は，人生を見通した学びへの子どもの重要な疑問の第一歩なのだと思う。うっかりしていると大人自身の弱みを突かれてたじたじとなって，子どもの論理に巻き込まれ答えそびれる。

学びがいかに一人ひとりの子どもが生きることを助けていくのか，大人との会話や大人自身の生き方の中に答えが見えるような，そんな出会いが子どもたちにはほしい。そして，一人ひとりの子どもの人格全体の中に，本当にその子どもを生かす学びの意義を位置づけるきっかけができたら，子どもは自らさまざまな学びを統合し，自身の育ちに役立たせていくだろう。学ぶ意義を，それぞれの子どもの人生の中で位置付ける手伝いをしていくのは大人の心がけるべきことのように思う。